Osaka Shoin Women's University Repository

紫の上の死をめぐって

久保重

源氏物語の「御法」の巻には、女主人公紫の上の死顔が描かれている。

……むなしき御からにてもいまひとたひみたてまつらんの心さしかなふへきおりはたゝいまよりほかにいかてかあらむと思ふにつゝみもあへすなかれて女はうのあるかきりさはきまとふをあなかましはしとしつめかほにて御木丁のかたひらをものゝ給まきれにひきあけてみ給へはほの〳〵とあけゆくひかりもおほつかなけれはおほ(源氏は)となあふらをちかくかゝけてみたてまつり給にあかすうつくしけにめてたうきよらにみゆる御かほのあたらしさにこの君のかくのそき給をみる〳〵もあなかちにかくさんの御心もおほされぬなめりかくなに事もまたがはらぬけしきなからかきりのさまはしるかりけるこそとて御袖をかほにおしあて給へるほと大将の君もなみたにくれてめもみえ給はぬをしゐてしほりあけてみたてまつるに中〳〵あかすかなしきことたくひなきにまことに心まとひもしぬへし御くしのたゝうちやられ給へるほとこちたくけうらにて露はかりみたれたるけしきもなうつくしけなるさまそかきりなきひのいとあかきに御色はいとしろくひかるやうにてとかくうちまきらはすこと(2)ありしうつゝの御もてなしよりもいふかひなきさまにてなにこなくてふしたまへる御ありさまのあかぬ所なしといはんもさらなりやなのめにたにあらすたくひなきをみたてまつるにしにいるたましゐのやかてこの御からにとまらなむとおもほゆるもわりなきことなりや（大成底本に拠る、括弧内は筆者注、以下同じ）

傍点部分(1)は、几帳の中で光る源氏が灯を近づけて見る紫の上の死顔、(2)は、几帳の外側からそれを覗き視する夕霧の目に映った紫の上の死顔である。美しい女性の死を、この物語は幾度も描いて来た。しかし、死顔について記述しているのは、これが唯一の例である。女性が容易に顔を見せることのなかった当時の風習と、慎しみ深い女性として描かれて来た紫の上の好尚とを考えると、多数の読者にその顔貌をあらわに見せるのは、女君に対してまことに無惨な様な思いがする。しかも、なぜ作者が、紫の上の死の場合に限

Osaka Shoin Women's University Repository

って、この様な特異な形象を選んだのであろうかという、素朴な疑いが私を捉えた。

思うに、作者は、柴の上の死において、美しき限りの「死」を描くことを志向し、その最頂点を、最も美しきもの――女主人公の死顔で、ひきしめようとしたのではないだろうか。神秘的な美しい死、だが、作者は、たとえば、往生人の胸から一茎の蓮華が咲き出ていた、という風な異相を描くことをせず、この女君の生涯、最も愛し合った夫源氏と、最も深い憧憬を秘かに寄せ続けていた義子夕霧との感動の眼を通して、清らな、光る様な白い死顔を描き上げた。これは、異相ではない。しかしそれに近いといってもよい極限的な「美しい死」そのものが、そこには、描かれているのだと、私は解したいのである。

ここで、源氏物語に描かれている女君の死について

(a) 死の直前における親しい人との訣別の場面

(b) 死の場面

を瞥見したい。

一、桐壺の更衣の場合

(a) いとにほひやかにうつくしけなる人のいたうおもやせていとあはれと物を思ひしみなから事にいてゝもきこえやらすあるかなきかにきえいりつゝものし給を御覧(帝)するにきし方ゆくすゑおほしめされすよろつのことをなく〳〵ちきりのたまはすれと御いらへもえきこえ給はすまみなともいとたゆけにていとゝなよ〳〵とわれかのけしきにてふしたれはいかさまにとおほしめしまとはるてくるまの宣旨なとのたまはせても又いらせ給てさらにえゆるさせ給はす……さりともうちすてゝはえゆきやらしとのたまはするを女もいといみしとみたてまつりてかきりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきはいのちなりけり……(きりつほ)

と、刻々に迫る死別の痛苦は、ここでは、桐壺帝の側に重心を置いて描かれている。更衣については、瀕死の上臈のあえかな姿態をこまやかに写して、帝と仕え人という関係でなく、一組の相愛の男女の間のでき事として、記述の焦点がしぼられている。宮中という背景場面にも、当然同席している筈の男女の人々についても、一切が省筆されているのは、その故であろう。因みに云えば、白居易の「長恨哥」の壮麗大規模の宮殿風景と、源氏物語桐壺の巻の宮廷の、帝の人間味と、両者のロマンティシズムの根源的な差異が、はっきりと顔を見せる場面である。

(b)更衣の死は、直接に叙せられていない。帝が若宮(源氏)・更衣の母など、周囲の人々の様を描く。就中、この場合も、帝の悲嘆に重心が置かれている。この巻の構造上から、当然そうあるべき省筆と云えよう。物語りとしては、筋の運びを急ぐ必要があるのである。

二、夕顔の場合

夕顔は、源氏に誘い出されて行った先の、某の院で、物の怪に怖じて急死するので、(a)はない。

Osaka Shoin Women's University Repository

(b) やゝとおとろかし給へとたゝひえにひえ入ていきはとくたえはてにけり……いふかひなくなりぬるをみたまふにやるかたなくてつといたきてあか君いきいて給へいといみしきめなみせ給そとのたまへとひえ入にたれはけはひものうとくなりゆく……

(夕かほ)

あけはなるゝほとのまぎれに御車よすこの人をえいたき給ふましけれはうはむしろにをしくゝみてこれみつのせたてまつるいとさゝやかにてうとましけもなくらうたけなりしたゝかにしもえせねはかみはこほれいてたるもめくれまとひてあさましうかなしとおほせはなりはてんさまをみむとおほせと……(同)

可憐な生前の姿態そのままの夕顔の亡骸が、感能的感覚的に、みずみずしく描かれている。翌夜、東山の尼寺に、私かに源氏が遺骸を見舞う条りも同様である。特に、その帰途の、

ありしなからうちふしたりつるさまうちかはし給へりしかわかゝくれなゐの御そのきられたりつるなといかなりけん契にかとみちすからおほさる御むまにもはか〳〵しくのり給ふましき御さまなれはまたこれ光そひたすけておはしまさする……(同)

源氏のイメージに焼きついている最後の印象――源氏の紅の下着を肌につけている艶な可憐な夕顔の姿態は、上の黒髪のこぼれて上むしろから流れ出ている様の描写と共に、まさに圧巻である。

三、葵の上の場合

夕霧を出産した折に、六条御息所の生霊に取り殺されるので、女君が死を予感して別れを惜しむという場面はない。

(b) とのゝうち人すくなにしめやかなるほとにはかにれいの御むねをせきあけていといたうまとひ給うちに御せうそこきこえ給ほともなくたえいり給ぬ(あふひ)

除目の夜、源氏も父大臣も兄弟達も参内している隙に、葵の上はあっけなく死ぬ。死の記述はこれだけの短文で終るが、源氏・両親をはじめ兄弟や女房達の深い悲嘆が、多くの紙幅をとって描かれる。

四、六条御息所の場合

(a)御代がかわったので、伊勢にあった御息所は斎宮と共に帰京した。間もなく病に冒される。物心細く、また、長い年月仏の道から遠ざかっていたことを罪深く感じて、出家する。源氏はそれを耳にして、六条の邸に御息所を見舞う。御息所は死期の近いのを、さとっている。

ちかき御まくらかみにおましよそひてけうそくにをしかゝりて御返なときこえ給ふもいたうよはり給へるけはひなれはたえぬこゝろさしのほとはえみえたてまつらてやとくちをしうていみしうない給かくまてもおほしとゝめたりけるを女もよろつにあはれにおほして斎宮の御事をそきこえ給……(みをつくし)

御息所は、出家の身であるのに、「女」と書かれているのが、目を惹く。御息所の伊勢下向以来の数年ぶりの対面、源氏がやさしい言葉を尽くして泣くので、御息所は、心情の深層にある思いを揺り起されて、たまりかねて泣く。宗教生活・出家生活に対する矛盾であるが、魂の奥に秘かに根を張っている情炎が、艶冶な雰囲気を漂

Osaka Shoin Women's University Repository

よわせてしまうのを、「女」という一語で表現したのであろう。それはもう、恋の一場面である。

とはくらうなりうちはおほとのあふらのほのかにものよりとほ（外）りてみゆるをもしもやとおほして（源氏）やをらみき丁のほころひよりみたまへは心もとなきほとのほかけに御くしいとおかしけにはなやかにそきてよりゐたまへる（御息所）ゑにかきたらむさましていみしうあはれなり丁のひむかしおもてにそひふし給へるそみやなら（斎宮）むかし（同）

源氏が几帳の帷の隙から覗き見る御息所の姿は、大殿油に照らし出されて、絵の様に唯美的で、感動的でさえある。しかも、源氏の男心は、若い斎宮の愛敬づいた美しさにも惹かれる。御息所は、斎宮を源氏に托し「消え入りつゝ泣い給」うのであるが、しかも、

まことにうちたのむへきおやなとにてみゆつる人たに女おやにはなれぬるはいとあはれなることにこそ侍めれましておもほし人めかさむにつけてもあちきなきかたやうちましり人に心もをかれ給はむうたてあるおもひやり事なれとかけてさやうのよついたるすちにおもほしよるなうき身をつみ侍にも女はおもひの外にてもの思をそふるものになむ侍けれはいかてさるかたをもてはなれてみたてまつらむとおもふ給ふる（同）

と遺言する。源氏が、斎宮を愛人扱いにすることのない様にと、執拗に念を押して云う。云い方も露骨で、気高さを誇りにして来たこの人の言葉とも思えない。子を憂える母の一心と、知ってか知らずにか、恋の相手への執着心とが搦み合った思いの、唯中から吐かれる言葉、それが、瀕死の、しかも尼姿の人の口から発せられるのである。その人間的な生生しい心の風景の凄絶さ。御息所の薄倖の生涯のうち、死を目前にした今の執こそ、最もあわれだというより外はない。

重病による肉体的苦痛については、次の短い記述が見られるだけである。

いとくるしさまさり侍かたしけなきをはやわたらせ給ねとて人（御息所）にかきふせられ給ふ（同）

(b)御息所の死についての描写はない。ただ次の様に記されている。

七八日ありて亡せ給ひにけり（同）

源氏二十九才、御息所三十六才の晩秋であった。

五、藤壺中宮の場合

(a)藤壺の袂別は

(イ)冷泉帝の三条の宮行幸

(ロ)三条の宮における源氏との訣別

の二場面から構成せられている。

(イ)　入道きさいの宮春のはしめよりなやみわたらせ給て三月にはいとをもくなら（ママ）せ給ぬれは行幸なとあり院（桐壺院）にわかれたてまつらせ給ひしほとはいといはけなくてものふかくもおほされさりしをいみしうおほしなけきたる御けしきなれは宮（藤壺）もいとかなしくおほしめさることしはかならすのかるましきとしと思給へつれとおとろ〳〵しき心ちにも侍らさりつれはいのちのかきりしり（帝）

Osaka Shoin Women's University Repository

かほに侍らむも人やうたてこと〳〵しうおもはむとはゝかりてなむくとくの事なともわさとれいよりもとりわきてしも侍らすなりにけるまいりて心のとかにむかしの御物かたりもなと思ひ給へなからうつしさまなるおりすくなく侍てくちおしくいふせくてすき侍りぬることゝいとよはけにきこえ給三十七にそおはしましけるされといとわかくさかりにおはしますさまをおしくかなしとみたてまつらせ給つゝしませ給へき御としなるにはれ〳〵しからて月ころすきさせ給事をたになけきわたり侍つるに御つゝしみなとをもつねよりことにせさせ給はさりける事といみしうおほしめしたりたゝこのころそおとろきてよろつの事せさせ給ふ（うす雲）

この場面は、いきなり十四才の帝の悲しい心持の叙述で始まる。帝は、源氏が実父だとは知らない。幼時に父院と死別し、今また母后を喪わなければならない悲しみに胸を塞まらせている。盛大な行幸鹵簿、美々しい入御還御の儀式、供奉の親王達公卿殿上人の様などの叙述一切が省筆されている。源氏は大臣であるから、当然お供に加わり、天子と母后の対面の席に近く侍っている筈だが、それさえ何一つ記されていない。情景は、尊い身分の母子の、口数少ない会話だけにしぼって写されている。それだけ藤壺の病状が急迫しているのである。朝廷は最近になって、入道后の宮の重態を知ったのであろう。そこで大騒ぎになって、京は勿論、諸国の諸大寺に祈願が行われ、この日は、帝のお見舞いの行幸となったのであろう。藤壺は平素から病弱の身に、三十七才の大厄を迎えて、内心死期の近いのを予感していながら、功徳の事を特に例年よりも力を入れて営まなかったと、自ら帝に申している。玉上琢弥博士は、「身を以って代りたいと祈り望んだ願があって、その願が叶った今、命を召される事をむしろ望むのではなかろうか」（源氏物語評釈）と解して居られる。政敵から、幼い春宮を守り、即位を見るまで藤壺が人知れず捧げた祈りと犠牲とを、われわれ読者は知っている。

かきりあれはほとなくかへらせ給（帝）もかなしき事おほかり宮（藤壺）いとくるしうてはか〳〵しうものもきこえさせ給はす御心のうちにおほしつゝくるにたかきすくせ世のさかへ（ママ）もならふ人なく心の（帝）うちにあかす思ふことも人にまさりける身とおほしらるうへの夢の中にもかゝる事の心をしらせ給はぬをさすかに心くるしうみたてまつり給てこれのみそうしろめたくむすほゝれたる事におほしをかる（ママ）へき心ちし給ける

帝は、定められた時刻には還らねばならない。「天子」の身分が、その進退行動に、鉄則を課しているからである。母后は死期が近いとわかる容態である。帝は若く美しい母宮が惜しく悲しい。それにも増して藤壺は悲しい。源氏と瓜二つの玉顔を目にしながら、帝の即位を成就させるために、あらゆる献身と努力を捧げて来た源氏が、実は父であることを、遂に帝に告げずに、世を去らねばならないからである。還御の時刻は迫る。年若いこの無垢の帝に、永久の不孝の罪を被せたままで、いま別れてしまってよいものなのか。しかし、藤壺は悲しみに堪えている以外にどんな方法があろう。行幸に供奉した親王達、上達部、殿上人達や、わが三条の宮の男

Osaka Shoin Women's University Repository

女の宮人達が、一斎に、おしあわせな女院と讃仰する中で、藤壺は、ひとり、栄光のかげで圧死させてしまった、個人としての恋と幸福とを想う。悲恋の一生であった。――先帝の名腹の内親王として生れ、入内して帝寵を専らにし、中宮、国母、女院と、史上無雙の高い地位に生きて来た一方、「心の中に飽かず思ふことも、人にまさりける身」と、あらためて思い知る藤壺であった。この心内の詞を、「岷江入楚」は「是は御心のうちに源の密通の事一つの御思ひなり」と注している。この時点に到って、藤壺も実は、源氏を恋していたのだったと、読者は初めて明かされるのである。

出家した高貴の女性が、死の迫る病床で、深い気がかりを、処理できない状態におかれているという一点で、われわれは、藤壺と、上に見た六条御息所とに共通するものを見る。

(ロ) 源氏との訣別。場所は(イ)と同じ藤堂の三条の宮、行幸の日とは対蹠的に、私的なしめやかな情景である。この場面は藤壺の臨終とつながるので、(a)―(ロ)とするよりも(b)の死の場面とも見ることができるが、私は源氏との会話に重点をおいて読む立場を採りたいので(a)の(ロ)という項を立てた。

おとゝはおほやけかたさまにてもかくやむことなき人のかきりうちつゝきうせ給なむ事をおほしなけく人しれぬあはれはたかきりなくて御いのりなとおほしよらぬ事なしとしころおほしたえたりつるすちさへいまひとたひきこえすなりぬるかいみしく……おほさるれはちかき御き丁のもとによりて御ありさまなともさるへき人〳〵にとひきゝ給へはしたしきかきりさふらひてこまかにきこゆ……

(藤壺詞)院の御ゆいこむにかなひてうちの御うしろみつかうまつり給こととしころおもひしり侍ことおほかれとなにゝつけてかはその心よせことなるさまをもしらしきこえむとのみのとかに思ひ侍りけるをいまなむあはれにくちおしくとほのかにのたまはするもほの〳〵きこゆるに(源氏)御いらへもきこえやり給はすなき給さまいといみしな(源氏)とかうしも心よはきさまにと人めをおほしかへせといにしへよりの御ありさまをおほかたの世につけてもあたらしくおしき人の御さまを心にかなふわさならねはかけとゝめきこえむかたなくいふかひなくおほさるゝ事かきりなしはか〳〵(源氏詞)しからぬ身なからもむかしより御うしろみつかうまつるへき事を心のいたるかきりをろかならすおもひ給ふるにおほきおとゝのかくれ給ぬるをたに世中心あはたゝしく思給へらるゝに又かくおはしませはよろつに心みたれ侍て世に侍らむ事ものこりなき心ちなむし侍なときこえ給ほとにともしひなとのきえいるやうにてはて給ひぬれはいふかひなくかなしき事をおほしなけく(藤壺)(源氏)

(同)

藤壺の命を存続させたいと切望する源氏の心は、内大臣という公的立場からの願いと、秘かに、藤壺を恋し続けている私的な個人的感情との、二面を併せ持っている。どちらも本心である。藤壺の源氏に対する犠いの詞は、彼の桐壺院の遺命と主上に対する忠誠に向けて云われている。入道后の宮としての毅然たる立場と行儀とを、一歩も崩さないものである。しかし、藤壺の御帳台に近い几帳のも

Osaka Shoin Women's University Repository

とに居る源氏には、恋しい人の仄かな肉声が届く。「うちの御後見……年頃知り侍ること……今なむあはれにに惜しく……」と、聞える言葉は、遠い遠い過去からの、入内したばかりの藤壺との出会以来、彼が宮に捧げ尽した、一途の恋、犠牲、奉仕、須磨流謫もその一端であった、その一切を、藤壺が嬉しく思っていると云ってくれたと、彼には受け取れたであろう。特に「(臨終の)今なむあはれに……」という一句から彼の受けた感銘は、筆舌に尽くせるものでなかったであろう。藤壺の伝えようとした真実の意味も亦、そこにあったと思われる。源氏が言葉も出ずに嗚咽したのは、無理もない。源氏の涙ながらの奉答の肉声も、また、藤壺に聞えたにちがいない。それは、外形は、内大臣としての誠意を述べる詞であるが、「昔より……心の至る限り……世に侍らむことも残りなき心地……」という言葉は、「年頃思したりつる筋を、今一度」藤壺の心奥に訴えを衷心の声であった。その真実の内容を藤壺は、聞き取ったであろう。源氏の詞のうちに、藤壺は息を引き取る。燈火の消え入る様な、安らかな、静かな臨終であった。「岷江入楚」は「源氏君、縁ありて、此臨終にあひ給ふ也」と注している。美しい袂別であった。藤壺の心理は、この場面には記されていない。しかし、上の、冷泉帝三条宮行幸の条の終りに、われわれの胸に深い感動を喚び起こさずにはおかない、切々たる、個人藤壺の内面感情の叙述があったことを、憶い起したい。源氏の、魂の奥処からしぼり出す様な訴えのうちに、藤壺は静かに命を閉じた。その臨終は、久しい恋の成就した悲しい幸福の時であったかとも推測される。しかしまた、藤壺が、源氏の衷情を受け容れながらも、入道者として、正念を全うするために、最後の精神力を傾けていたとも考えられる。作者はそれについて何も知らせない。わざと詳述を避けたものと思われる。文学的な深い心づかいと云えよう。

(b) (藤壺)ともしひなとのきえいるやうにてはて給ぬれはいふかひなくかなしきことをおほしなけく (源氏)

上記(a)—(1)の末尾の部分である。このあと、本文は、世挙って、国母の死を悲しむ様を叙し、女院が、生前世俗的生活の面でも仏道信奉者としての修道面でも、権威にまかせて社会に迷惑を及ぼすなどのことなく、常に、慎ましやかで、しかも誠意を尽す人であったと、その高徳の人柄をたたえ、

をさめたてまつるにも世中ひゝきてかなしと思はぬ人なし殿上人なとなへてひとつ色にくろみわたりてものゝはへなき春のくれなり(同)

と諒闇のさまを描いている。しかるに物語は、ずっと後に、源氏が夢に、藤壺が恨みを述べるのを、仄かに見る場面を描いている。凍る様な月の夜であった。

あかすかなしとおほす(源氏)にとくおきたまひてさとはなくてところ〳〵にみすきやうなとせさせ給ふくるしきめみせ給ふとうらみ給へるもさそおほさるらむかしをこなひをし給ひよろつにつみかろけなりし御ありさまなからこのひとつ事にてそこのよのにこりをすすい給はさらむとものゝ心をふかくおほしたるにいみしくかなしけれはなにわさをしてしる人なきせかいにおはす(藤壺の霊)

Osaka Shoin Women's University Repository

らむをとふらひきこえにまうてゝつみにもかはりきこえはやなとつく〳〵とおほす……（あさかほ）

次の世でも、藤壺のさびしい魂は、源氏に寄せる思いを抱いたまま、冥い中有の世界を漂泊しているのであった。

六、一条御息所の場合

柏木の未亡人、落葉の宮の母は、朱雀院の更衣であった人である。律令制時代の内親王は未婚のまま終生気高く過すものという思想を、固く信奉して宮との生活に心の支えと、高い精神的指標を見出していた。柏木に宮が降嫁するのも、内心不賛成であったが、朱雀院がとり決めたことに反対できなかった。柏木の死後、夕霧が、宮に思いを寄せるが、二人の間には何事もない。それを病中の母御息所は、宮が、すでに夕霧と結ばれたものと誤認して、今となっては、宮をせめて見捨てることのない様にと、宮の代りに夕霧に哥を贈った。それが、夕霧の家庭内の手違いで、返事が二日遅れ、夕霧の来訪もなかった。重病の御息所は、「内親王が一夜で男に捨てられた。」と世上の物笑いになるのを苦にして、危篤に陥る。随って、場面は(b)から始まる。

(b)（御息所）いとわりなくおしこめての給ふをあらかひはるけむ事のは（落葉の宮）もなくてたゝうちなき給へるさまおほとかにらうたけなりうちまもりつゝあはれなに事かは人にをとり給へるいかなる御すくせにてやすからすものをふかくおほすへきちきりふかゝりけむなとの給まゝにいみしうくるしうし給ものゝけなともかゝるよはめに所うるものなりけれはにはかにきえ入りてたゝひえにひえいり給ふ……かくさはく程に（夕霧）大将殿より御ふみとりいれたる（御息所）

ほのかにきゝ給てこよひもおはすましきなめりとうちきゝ給ふ（御息所心語）心うくよのためしにもひかれ（落葉の宮）給へきなめりなにゝわれさへさる事のはをのこしけむとさま〳〵（御息所）におほしいつるにやかてたえいりたまひぬあえなくいみしといへはをろかなり（夕きり）

来世の安楽を願う心の余裕さえ持てない無残さで、御息所は、わが愛子であり、わが女主人である落葉の宮の身の成り行きに思いを残して死ぬ。特に、一度息を引き取った人が、聴覚だけがまだ生き残っている暗黒の世界で、夕霧の文を持った使が来たのは、今宵も訪れぬ心と察知して、苦悩する凄絶さ、そのまま一点の救いも見出すことなしに死んでしまう無明の闇の深さは、いたましい限りである。夕霧の巻は、諧謔的筆致が所々に顔を出して、物語が深刻性を帯びるのを救っているが、当の登場人物、わけて、落葉の宮とその母御息所を翻弄する運命は、本質的には深刻な問題を孕んでいる。誤認と錯誤の谷間で、御息所は死んだので、物語の筋の上からは、執念は霧消してしまうが、上にも云った通り、その本質は、荘園制に移行する歴史の軌に轢き壊される皇女の生活を憂慮する母の、死んでも死に切れない深刻な気がかりにあると云えよう。

以上が、源氏物語の第一、二部中、紫の上の場合を除いた、登場女性の命終の際の描写の見られるものである。それぞれが、何らかの意味で、美しい訣別、美しい死として描かれている。さてこの六例の凡てに共通して見られる特色は概ね次の通りである。

Osaka Shoin Women's University Repository

一、死や病いの肉体的な苦痛や醜悪さを写していない。肉体的な衰弱や無力感を描く場合は、そのことの故に女君の魅力が加わる。

二、光る源氏と関連の深い女性が採られている。（一条御息所だけは別である。）

三、袂別も死も、美的見地から描いている。随って、採り上げられている女君達は、「いまだ盛り」の年令である。（一条御息所は四十才代かと推定せられるが、この場合は、美しい年令を必要としない。）

四、別離の心理や情景を、情緒的に描いている。

五、死や別離を思想的、形而上的展望に立って扱っていない。

六、現実世界を、無意味なもの、無価値なものとして否定的に考えていない。

七、死に逝く人が、現世に気がかりを残して去る。

八、死顔を描いたものは見当らない。死者の姿態を描くことはあっても——

九、女君の死は、物語の筋の進展過程のうちの一でき事である。あるいは筋を展開させる役割をもつ。

七、紫の上の場合

御法の巻は、紫の上の訣別と死とを描くために用意せられた一巻である。冒頭から、その重態のさまが書き進められる。

むらさきのうへいたうわつらひ給ひし御心ちの後いとあつしくなり給てそこはかとなくなやみわたり給ことひさしくなりぬいとおとろ〳〵しうはあらねととし月かさなれはたのもしけなくいと〻あえかになりまさり給へるを院（源氏）のおもほしなけく事かきりなし

紫の上は、周知の通り、「樺桜の匂ひ出でたる」に喩えられる華やかな美貌と明るい性格、賢明な資質と共に、品性・趣味・教養・技能・判断力等において抜群に優れた理想的女性として描かれて来たが、ただ一つ嫉妬癖を、当時の女性としての欠点といえば欠点として作者から本来の性質として付与されていた。源氏ひとりを頼みとし深く愛しているだけに、源氏からも、深く愛されることを求め、能うならば、源氏の愛を独占したいと望むのは、当然と云えようが、源氏が当惑して、

すこしわつらはしきけそひてかと〳〵しさのすゝみ給へるやくるしからむ（あさかほ）

と教えることもあった。もうその頃から、十九年の歳月が過ぎた。御法の巻は、はじめから、紫の上の、一切の執着を去った心境を描く。紫の上は今年は四十三才、夫源氏に最初に出家の許可を願った時から、もう五年も経っている。

（紫の上）身つからの御こゝちにはこの世にあかぬことなくうしろめたきほたしたにましらぬ御身なれはあなかちにかけとゝめまほしき御いのちともおほされぬをとしころの御契かけはなれ思（源氏に）なけかせたてまつらむ事のみそ人しれぬ御心の中にも物あはれにおほされける（みのり）

人知れぬ心のうちで、紫の上は、病い勝ちのわが身が、もう長く

Osaka Shoin Women's University Repository

はない事に気づいている。思いの残る肉親もなく、見残した栄達もない。ただ自分が死ねば源氏が嘆くのがいとおしいと思う心境である。

後の世のためにとたうとき事ともをおほくせさせ給つゝいかてなをほいあるさまになりてしはしもかゝつらはむ命のほとはをこなひをまきれなくとたゆみなくおほしの給へとさらにゆるしきこえ給はす……御ゆるしなくて心ひとつにおほしたゝむもさまあしくほいなきやうなれはこのことによりてそ女君はうらめしく思きこえ給ける我御身をもつみかろかるましきにやとうしろめたくおほされけり

源氏が、紫の上の出家を許可しないのは、病弱の妻へのいたわりと、更に根本的には、「出離」ということを非常に厳密に考えている、敬虔な信仰心とに基くものなのであるが、女君としては夫が恨めしい。女三宮も朧月夜も槿前斎院も、みな仏道に専念している（若菜下）のに、自分だけが許されないのは、仏の叱りを受けているのだろうかと、来世が恐しく感じられたりもする。

以上を前文として、紫の上の訣別が静かに語り出される。上に見てきた女君達の場合と比べて、しめやかに、長い時間をかけて語られる。作者は、紫の上の訣別と死とにおいて、何か、この物語の重要な目的の一つを達成しようと意図しているようである。

（a）紫の上の訣別

(イ) 春、法華経千部供養(願)

としころわたくしの御くはんにてかゝせたてまつり給ける法花経千部いそきてくやうし給わか御殿とおほす二条院にてそし給ける七そうのほうふくなとしな〳〵たまはすものゝいろぬいめよりはしめてきよらなることかきりなしおほかたなに事もいといかめしきわさともをせられたり（同）

七僧を招請しての法華経千部供養、「世ゝへたる御くわんにや」とある通り、多くの手間と時間をかけて準備した大規模の法華八講である。紫の上は、これを春三月、私邸二条院で、独力で行う。上に見た藤壺の質素と格段の差であるが、紫の上の万感を注ぎこんだ今生最後の仏事であることを思うとこの企画に共感を感じずには居れないものがある。後世安楽の祈願、前生今生の一切の罪障の償、出家を遂げぬことの謝罪――凡ゆる誠意と財とを尽くしても、仏に対して心がそれで足るというものではなかったことであろう。三月を選んだのは、春との別れの心持がこめられているのだろう。二条院の桜との別れ、世の多くの人々との別れもこの機会に織り込んで考えられていたことと思われる。花散里、明石も招かれた。

三月の十日なれは花さかりにて空のけしきなともうららかにおもしろく佛のおはすなる所のありさまとをからすおもひやられてことなりふかき心もなき人さへつみをうしなひつへしたききこるさんたんのこゑもそこらつとひたるひゝきおとろ〳〵しきをうちやすみてしつまりたるほとたにあはれにおほさるゝをましてこのころとなりてはなに事につけても心ほそくのみおほしする（同）

好晴、爛漫の桜、大法会の華やかな盛儀、そのまま極楽浄土かと

Osaka Shoin Women's University Repository

思われる中にも、五巻の日は特に薪樵る行道が行われて、八講のうち最大の山場である。その最高潮に読経の途切れる静謐の一時がある。紫の上の弱くなった心は、その哀切さに堪えられない。明石の許に哥を贈る

おしからぬこの身なからもかきりとてたきゝつきなんこととのかなしき（同）

華やいだ世界の中で、ひとり離れ去って行く身の淋しさが胸に迫って、紫の上はいい知れず悲しいのである。

夜もすからたうときことにうちあはせたるつゝみのこゑたえすおもしろしほの〳〵とあけゆくあさほらけ霞のまよりみえたる花の色〳〵なを春に心とまりぬへくにほひわたりてもゝ千とりのさへつりもふえのねにをとらぬ心地してものゝあはれもおもしろさものこらぬほとにれうわうのまいてきうになるほとのすゑつかたのかくはなやかにきはゝしくきこゆるに……かみしも心ちよけにけうあるけしきともなるをみ給にものこりすくなしと身をおほしたる御心のうちにはよろつの事あはれにおほえ給（同）

参会した一同が陶酔している中で、紫の上ひとりが歓楽に乗ってゆけない。二条院の春景色と法会の壮麗さが諧和してつくり出している世界の美しさ楽しさがわかるだけ、それだけ深く、却って孤独感がこたえるのである。

きのふれいならすおきゐ給へりしなこりにやいとくるしうしてふし給へりとしころかゝる物のおりことにまいりつとひあそひ給人〳〵の御かたちありさまのをのかしゝさへともことふえのねをもけふやみきゝ給へきとちめなるらむとのみおほさるれはさしもめとまるましき人のかはともゝあはれにみえわたされ給まして……さすかになさけをかはし給かた〳〵はたれもひさしくとまるへき世にはあらさなれとまつわれひとりゆくゑしらすなりなむをおほしつゝくるいみしうあはれなりことはてゝをのかしゝかへり給なんとするもとをきわかれめきておしまる花ちるさとの御かたに

たえぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにとむすふ中の契を

管絃を演奏している親王達や上達部の、それぞれの音色も今日が聞き納めと思うので、紫の上は、それらの一人一人に感懐をおぼえる。まして同じ六条院にあって、四季折々の情けを交して来た花散里や明石には一入である。紫の上は、彼女らに源氏を引き渡さねばならないという種類の悩みや嫉みとは遠い心境にいる。今日は身を横たえて、法会が果てて帰って行く人々のけはひを、身にしみる思いで聞いている。「遠き別れ」と思われるのである。死期が近づいていることを、予知している美しい魂の、素直な、自然な悲しみといえようか。これは執着心とは全く別次元の哀傷である。本文を、余りに長長と引用してしまったが、私には、作者が描いている純美の世界に属する感傷にアプローチするには、原文に頼るより外に方法がなかったのである。紫の上の、世の人々との訣別は、紫の上の心の内側で行われた。余りにも繊細で、純粋な惜別感を、美しさを全く毀さずに描くために、この方法が採られたのであろう。背景と

Osaka Shoin Women's University Repository

なった千部経供養の現世的華麗が、女君の心という、形なきものを描き出すことを、可能にしたと云えよう。

(ロ) 夏、中宮二条院退下

夏になりてはれいのあつさにさへいとゝきえ入給ぬへきおり〳〵おほかり……かくのみおはすれは中宮この院にまかてさせ給

特に酷暑という年ではなかったが、夏はやはり紫の上の病軀にこたえた。もう誰の目にも、恢復の望みは持てないと見える。明石中宮が御見舞に二条院に退出される。藤壺中宮重態の際の冷泉帝行幸が連想される光栄である。中宮という身分制約があるので、表向きは、里邸退出という形である。それにしても、中宮の里邸は六条院で、二条院は源氏の別邸で、紫の上が私邸に使っている所だから、朝廷の破格の取り扱いを想うべきである。紫の上にとっても、二条院にとっても無上の光栄である。

ひんかしのたいにおはしますへけれはこなたにはたまちきこえ給(紫式)きしきなとれいにかはらねとこのよのありさまをみはてすなりぬるなとのみおほせはよろつにつけてものあはれなりなたいめんをきゝ給にもその人かの人なとみゝとゝめてきかれ給かんたちめなといとおほくつかうまつり給へり

女が后に立っている場合、里邸に宿下りをすると、両親は、后に寝殿を譲るのが普通であるが、紫の上は重態で動かせないので、明石中宮は、東の対を滞在所とすることになる。止むを得ないとは云え、紫の上にとって、これまた破格の、無上特遇である。東の対で、名対面の儀が行われているのが、聞えてくる。「河海抄」に、「中宮行啓儀、北山抄云、六府次将以下一員、近衛等供奉、装束同行幸、其外宮司兼中少将者帯弓箭供奉、入御之後王卿名対面、宮司問之、諸衛不脱弓箭着饗座矣。」とある。行啓の盛儀、想うべしである。紫の上は、名乗りの声で、彼は誰、此は誰と、今日は、特に耳にとまる。この儀式が聞き納めかも知れないと思われるので感慨が深い。いつもより上達部の数が多い。供奉の人々もまた、深い思いをしているのであろう。紫の上は、わが育て子の中宮の栄えを見るにつけ、その皇子の即位を見果てずに去ることよと思うと物悲しい。よろずに感じ易くなっているのである。

やがて中宮は、寝殿に紫の上を見舞う。源氏がちょっと顔を見せたあと、気を利かして去る。中宮は東の対には帰らず、紫の上の傍らにあって、私的な、自然な人間関係に立ち帰って、時を過すのであった。明石も席に加わって、心深い人同士のしずかな会話が交わされる。

(紫の上)うへは御心のうちにおほしめくらす事おほかれとさかしけになからむのちなとのたまひいつることもなしたゝなへてのよのつねなきありさまをおほとかにことすくなゝる物からあさはかにはあらすのたまひなしたるけはひなとそとにいてたらんよりもあはれに物こゝろほそき御けしきはしるうみえける宮たちをみたてまつりたまうてもをの〳〵の御ゆくすゑをゆかしく思きこえけるこそかくはかなかりける身をおしむ心のましりけるにやとて涙くみ給へる御かほのにほひいみしうおかしけなりなと

Osaka Shoin Women's University Repository

かうのみおほしたらんとおほすに中宮うちなき給ひぬ（同）

紫の上は、身に迫る死を、はっきりと知覚している。そして、その運命に素直な気持で随順している。それにしても余りに静かである。精神の内部に、人生の本質に達した、深い諦観が根を張っていなければ、とても、この様な素直さ、この様な静かさは生じて来るまい。藤壺は、「勤行のために御身を傷められた」と側近の女房達が嘆いた（薄雲）と記されていたが、紫の上については、当然行っていたにちがいない勤行について、作者は一言も触れなかった。多分、それはこの女主人公の美的イメージを破ることを警戒した結果かと、思われる。ここまで来てはじめて、われわれは、紫の上が内面に成し遂げていた無常観を示された次第である。それは浅いものでなかった。言少なに、おおどかに、一般的に語られる言葉から、中宮は、紫の上の心境の尊い美しさを察知して泣けてしまう――人間と人間との真の邂逅とも云うべき、理解と共感とを、二人の女君は、頒ち持つのであった。若宮達が訪れたのを見ても、紫の上は、心細い。幼いかわいい宮達の成人を見とどけ得ない身が悲しくて涙ぐまれる。その顔がまた、ひどく美しい。今はもう、極く近親の人々との接触に、名残を惜しむ紫の上である。情緒的な悲しみという表面が多く描かれているが、書かれていない部分、心の内部で成されている死の準備、寂滅観が、悲しみを美的で調和的な性格のものたらしめているのを、われわれは知った。逆に云えば、寂滅観を、外面の悲しみが、優雅に彩っているからこそ、紫の上は美しいのである。

(ハ) 秋、中宮御読経

みと経なとによりてそれいのわか御かたにわたり給

読経というのは、源氏物語では、僧侶による誦経を指す。だから、これを中宮御読経と解した諸注は、当を得ている。「わが御方」を六条院と解く説と、二条院東の対と解する説とが見られるが、私は後者に従いたい。天皇の、季御読経に準じて、春秋二季宮中で行われる盛儀である。それが、中宮退下中のために、里邸で催される。それが二条院で催されるのは、二条院にとって、紫の上にとって、空前の光栄であるからこそ、この巻に記される意味があると思われるからである。春の法華経千部供養、夏の中宮行啓につづいて、秋に、中宮秋季御読経を設定して、紫の上の現世生活の、最後の光栄、栄達を示したものと見たい。記事は上記の通りで、詳細は述べられていない。前二者に述べたところと、重複を避けるための省筆かと思われる。季の御読経は、衆僧を招請して大般若経を読誦する。大般若経に見られる空の思想は、紫の上に死の迫った、今の時点に、あうかとも思われるが、一字の記述も見ないのは、騒がしくさかしら立つことを、物語りの語り手が気づかって避けたためであろうか。

(ニ) 二条院を匂宮に委托

明石中宮のお生みした若宮達のうち、女一宮と三の宮とは、紫の上が手許で養育したので、特に愛情を感じている。病間、人の聞かぬ折を見て、五才の三の宮（匂宮）を枕頭にまねいて

おとなになり給ひなはこゝにすみ給てこのたいのまへなるこう

Osaka Shoin Women's University Repository

はいとさくらとは花のおり〳〵に心とゝめてもてあそひ給へさるへからむおりは仏にもたてまつり給へときこえ給へはうちうなつきて御かほをまもりてなみたのおつへかめれはたちておはしぬ（同）

紫の上は、最後に、二条院を匂宮に委托する。最も愛した紅梅と桜について、特に遺言して、「花の咲く時節には仏に奉ってほしい。」という。「岷江入楚」は「紫上、我身にとはの給はぬ心妙なり」と云う。欲を知らない幼い宮に、最後の美しい委托をして、紫の上の棄却すへき何物も残らない。匂宮と女一宮を

みさしきこえ給はんことくちおしくあはれにおほされける（同）

とあるが、これとても、愛であっても執ではない。「うしろめたき絆だにまじらぬ御身」と初めから作者は述べている。紫の上は、この頃になって、いよいよ透ける様な美しさになる。

こよなうやせほそり給へれとかくてこそあてになまめかしきことのかきりなさもまさりてめてたかりけれときしかたあまりにはひおほくあさ〳〵とおはせしさかりは中〳〵このよの花のかほりにもよそへられ給しをかきりもなくらうたけにおかしけなる御さまにていとかりそめに思給へるけしきにる物なく心くるしくすゝろにものかなし（同）

（b）紫の上の死

野分の吹き荒れた日の夕方、紫の上は脇息に寄りかかって前栽を眺めていると、源氏が来て、起きているのを見てよろこぶ。紫の上は、自分が死ねば、どんなにか源氏が悲しむに違いないと思うと、

ものあはれで、

をくとみる程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩の上露（ママ）

と詠む。これに源氏と中宮が唱和の哥を、それぞれ詠むうちに、容態が急変する。

（紫の上詞）いまはわたらせ給ひねみたり心ちいとくるしくなりはへりぬいふかひなくなりにける程といひなからいとなめけにはへりやとてみ木丁ひきよせてふし給へるさまのつねよりもいとたのもしけなくみえ給へはいかにおほさるゝにかとて中宮は御てをとらへたてまつりてなく〳〵みたてまつり給にまことにきえゆく露のこゝちしてかきりに見え給へは……よひとよさま〳〵の事をしつくさせ給へとかひもなくあけはつるほとにきえはて給ひぬ（同）

丁度、目前の萩の露の消えるのに似た死であった。

紫の上は、子孫を残さずに、しかも若死をした。一方明石は、長生をし、その子孫は繁栄する。一女は中宮になり、中宮の所生の皇子・皇女は次の通り多く、その前途も洋々たる幸福が予想できる。

紫の上 ═══ 今上 ┬ 春宮
　　┬ 二宮（式部卿の宮）
　　┬ 三宮（匂宮、兵部卿の宮）
　　┬ 五宮
　　└ 女一宮

光る源氏 ═══ 明石中宮

明石

Osaka Shoin Women's University Repository

源氏の出家他界の後の六条院と二条院とは、明石の君の孫宮達の住居の観を呈し、彼女は孫宮達の世話に明け暮れ余念がない。

二条院とてつくりみかき六条の院の春のおとゝとて世にのゝしる玉のうてなもたゝひとりの御末のため成けりとみえて明石の御方はあまたの宮たちの御うしろみをしつゝあつかひきこえ給へり（匂兵部卿）

明石こそ、古物語の理想として来た女君の幸福の典型である。しかし、源氏物語の作者は、古物語がまだ見出し得なかったところに、女君の最良の晩年生活を見出している様である。御法の巻の提示しているものは、紫の上の、内面生活の完成のさまとその死とである。作者は、この巻の冒頭から、死期の近いのを予知した紫の上の、周囲との訣別のさまを、情緒的に、美的に描いて来た。背景に、大がかりな行事やでき事を設定して、豊麗な王朝絵巻的場面を写し出した。しかも女君の死まで読み了ったあとに、最も印象に残ったものは、清らかに澄んだ精神的な美であった。紫の上の内部に完成していた一顆の美しい心根であった。前項に見た女君達の、それぞれの訣別と死と、紫の上のそれとを区別する相異点も、また、まさに、この心根の有無にかかわるものである。紫の上は、若くして、子孫を残すことなくして死んだ、終生の最後の悲願をも達成せずに。けれども彼女は、物語中の誰もが、藤壺中宮でさえなし得なかったわざを、やさしい、素直な、すこしも無理をしないやり方で、成しとげた。一つは煩悩の棄却、他の一つは、人間同士の深い魂の触れ合いであった。若くして死んだのは、その生と死に、美的外貌を失わせない為の、作者の好みであったのであろう。その点は、他の美しい女君達も同様である。実子を持たせなかったのは、作者の創意に出た工夫である。紫の上に、涅槃に近い様な、美しい内的棄却を経て、自然界で白露が消える様な、素直な死に方をさせるのに、実子があっては、都合が悪いのである。作者は、母が、人知らぬ心の中ででも、子を棄てることを美しとはしなかったのであろうか。あるいは、それを、女にとって不可能事と考えていたのだろうか。他の女君達の執心が、身後に残るさまを見ても、殆どが子が関っているのもだった。さらに紫の上と、明石中宮が、真の人間的邂逅を経験するのに、実子であっては困るのである。これは、一面、継子物語の類型を破る企画なのだから。

子孫を有たないために、絶対的な意味での、個の生命を、この女君は生きたのであった。良く生き良く死ぬ個としての人生に、深い意義を持たせることができたのであった。こういう深遠な智慧を、彼女は仏教から得ていたのであろうか。かつて源氏は、法華経供養の準備を完璧といえるまでにし遂げた彼女の素養に感嘆した。

女の御をきてにてはいたりふかくほとけのみちにさへかよひ給ける御心の程なとを院はいとかきりなしとみたてまつり給て…

…

とあったが、それは、生命の本義に対する理解にまで及ぶものだったのだろうか。

源氏は、紫の上の生前の素志を想って、夕霧に命じて、死後落飾させる。それも形式上の人生の仕上げとして、全然無価値という次

Osaka Shoin Women's University Repository

第ではないだろうが、紫の上は、その以前に、生前に、内面精神において、人生の仕上げをすでに完成していたのだった。本稿の冒頭に見た死顔の美しさが、それを告げていると私には思われる。その意味で、夕霧の見た紫の上の死顔の、神秘的な美しい白さは、異相でない故にこそ一層尊い、人生の美的完成の証しと私には思われるのである。

（本学教授）